



初めて知る神奈川

—有形無形の財産

陳 熙
(中山大学)



2016年12月4日から23日まで、私は幸運にも訪問研究員として日本の神奈川大学非文字資料研究センターを訪れ、勉強と交流を行う機会を得た。

4日の夜、私は神奈川大学歴史民俗資料学研究科の程亮さんとともに東京の羽田国際空港に到着した。日本に対する私の第一印象は「精緻・清潔・秩序」である。成田紅音さんをはじめとする非文字資料研究センターのスタッフが事前に準備してくれていたため、私は順調に「国際寮」に入ることができた。ここは大学まで徒歩6～7分程度の大変便利な場所にある。

中国と比べると国土面積は小さく道も狭いが、起伏に富み曲がりくねった細長い道を毎日歩けるのは楽しみなことでもあった。道の両側にはビルや洋館、一戸建ての住宅が建ち並び、いずれも整然とした外観であり、巧みに配置された設計の庭園などもあった。毎日大学まで歩く道すがら、行き交う人の数も多くなく、リラックスして思索にふけることができた。

日本語はわからないが、神奈川大学日本常民文化研究所、非文字資料研究センターと歴史民俗資料学研究科について多少は理解しており、特に漁具や漁業に関する研究は驚嘆に値する。今回の主な目的は日本の小劇場に関する資料の収集、儀式で行われる劇や能・歌舞伎に関する研究である。そこで、私は廣田律子教授・吉川良和教授・早稲田大学の平林宣和教授・東洋文庫の田仲一成先生を訪ねた。教授たちはそれぞれの専門分野で知られた存在であり、研究に対する厳格ながら包容力のある姿勢には感銘を受けた。

先生方とのコミュニケーションを通じて、フィールドワークと文献調査がともに重要であると、より一層実感した。中国の演劇界については、さらに深く掘り下げることが求められ、緻密に系統立てて儀式劇と村落のフィールドワークを行い、その後比較研究することによって各地域の共通点と相違点を考察することが必要だ。舞台表現という視点で見ると、中国の伝統的な演劇における役者と観衆との関係について、研究が十分になされているとは言い難い。その要因は複雑で一言で言い表すのは難しいため、ここでは割愛したい。

また、この分野での生き字引ともいえる田仲一成先生との交流は忘れがたいものとなった。田仲先生の研究は演劇を専門とするが、その研究内容は人類学、社会学などにも及ぶ。“何を学ぶかではなく、何のために学ぶか”とは先生の言葉だが、人類学、社会学の知識によって演劇に対する視野を拡大し、より高く広い視点を持って全

体の角度から、儀式や村落・集団・社会・国家に関する問題を考えておられる。この様な要因が複雑に絡み合い、それぞれの社会の演劇の発展に影響している。社会の経済発展の度合いを見ても、日本は社会構造が相対的に安定しており、村落もまた安定している。したがって村人は伝統を重んじ守っていこうとする傾向が見られ、ある伝統を代々受け継ぎ演じることができる。一方、中国は社会経済が流動的で、伝統的な演劇の様式を留めておくことも難しく、ゆえに複雑に変化してしまう。先生のこのような研究の構想と方法は私にとってお手本でもある。

小熊誠教授にご指導いただき、その紹介で、私は東京大学東洋文化研究所の菅豊教授を訪ね、大変有意義な時間を過ごすことができた。菅教授が中国の民間手工芸や観賞魚の養殖などに対して学術的な情熱と幅広い視点を持ち、積極的なフィールドワークを行っていることに大変感心した。また、東洋文化研究所の蔵書の多さにも感服した。

わずか20日間と短い期間ではあったが、一日も無駄にすることなく積極的に過ごすことができた。生活面では先進的なゴミの分別方法を学んだり、学術面においては視野を広げることができ、これらは全て私にとって、無形あるいは有形の財産となった。



写真 東洋文庫の田仲一成先生と